

ガールフレンドがほしい
青い目のバンチョウ



山中 恒作
長尾みのる 絵



(山中恒みんなの童話8)

青い目のバンチ

1984年12月 初版第1刷発行

著 者 山 中 恒

画 家 長 尾 み の る

発行者 今 村 廣

発行所 株式会社 偕 成 社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3の5

電話 編集(03)260-3229(代) 振替 東京5-1352番
その他(03)260-3221(代)

本文印刷 新興印刷製本株式会社

多色印刷 小宮山印刷株式会社

製 本 文勇堂製本工業株式会社

©H. YAMANAKA, M. NAGAO 1984

NDC913 254p. 22cm

◇落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

Published by KAISEI-SHA, Printed in Japan.

ISBN4-03-517260-X

ガールフレンドがほしい 青い目のバンチョウ

山中 恒・作

長尾みのる・絵



かみの毛が黒くても、金色でも、
栗色でも、目の色が青くても、黒く
ても、はだの色が白くても、黄色く
ても、黒くても、人間は人間です。
人間である以上、心と心でむすばれ
るはずです。

いまから、二十年もまえに書かれ
た青い目のパンチョウの話ですが、
あなたも、きっと、この太田デンベ
エがすきになると思います。



もくじ

9	8	7	6	5	4	3	2	1
デンヘエがうっかり日本語を話すこと	八百正のおばさんが警官をよぶこと	デンヘエがアキラの姉に救われること	福住夫人が太田家へとなりこむこと	デンヘエが赤ボコたちとたたかうこと	アキラがおかしなけんかを売ること	デンヘエがマキ子の母をたすけること	マキ子の母がよこやりを入れること	デンヘエがマキ子となかよくすること
104	92	80	68	56	44	32	20	8



20 マードック氏が心から同情すること
 19 デンベエがデンジロウにうたれること
 18 ユキエとナツコが死ぬほどわらうこと
 17 デンベエが駄でもんないになること
 16 ミセス・マードックが目をまわすこと
 15 デンベエがいたい借金にとまどうこと
 14 みんながデンベエを委員にすること
 13 デンベエが学生にもんくをつけること
 12 母のハツエがむかしの話をする事
 11 デンベエがくらやみで目玉をむくこと
 10 みんながかけの答えをききにくること

242 229 216 204 191 178 166 153 141 128 116



著者紹介

著者 やまなか ひさし
山中 恒

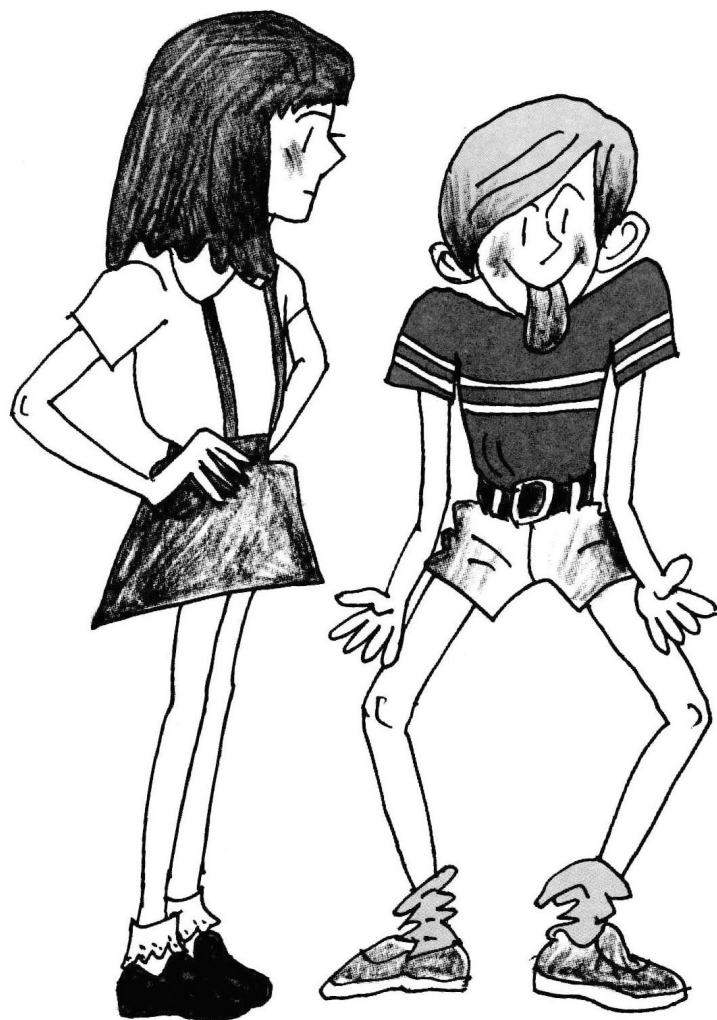
1931年北海道小樽市に生まれる。小学中級向け作品として「山中恒みんなの童話」(『おとうさん×先生＝タヌキ』『あばれんまとおひなさま』など)刊行中、中高学年向きに、「山中恒児童よみもの選集」(全十五巻)などがある。
住所 神奈川県藤沢市鵠沼松ヶ岡

2-11-17

画家 ながお
長尾 みのる

1929年東京に生まれる。早稲田大学(旧)工芸美術研究所に学ぶ。イラストレーターとして新聞・雑誌を中心に活躍している。児童書に『なんだかへんて子』『クラマはかせのなぜ』など多数ある。
住所 東京都杉並区西荻南4-7-6

青い目のバンチョウ



山中恒・作

Ⅰ デンベエがマキ子となかよくすること



新学期^{しんがつき}がはじまったとき、このクラスには七人の転校生^{てんこうせい}があつた。学校の近く^{ちか}に大きな団地^{だんち}ができたからだ。

もともからこの学校にいたものは、その連中^{れんちゆう}を「ダンゴ」とよんだ。「団地^{だんち}っ子^こ」がちぢまって、いつのまにか「団子^{だんご}」になつたらしい。

そこは、東京の新宿^{しんじゅく}から私鉄^{してつ}の急行^{きゆうこう}にのつて約^{やく}三十分^{さんじふぶん}。国電^{こくでん}もとおっている。ついこのあいだまで、むかしの宿場町^{しゆくばまち}のおもかげをのこした小さな町であつたが、ここ数年^{すうねん}のあいだに建売^{たてう}り住宅^{じゆうたく}やマンモス団地^{だんち}ができたので、人口^{じんこう}がいっぺんに十^{まん}万^{とつば}を突破^{とつぱ}して、商店^{しょうてん}の多いほこりっぱい町になつてしまった。

ところで、この転校生^{てんこうせい}の中に「ダンゴ」でないのがひとりいた。その少年は、色のまっくろけな背^せのひくい、まるでびっくりしたような顔つきの女の人につきそわれていた。

クラスの生徒たちの目は、おっとびだしそうなほど大きく見ひらかれて、その少年をじろじろとながめまわしていた。そして、この少年といっしょに、はじめてこのクラスに紹介されるはずの転校生までが、おなじようにその少年を見ていたのである。

無理もない。教室の窓からさしこむ朝の日の光に、その少年のかみの毛は、まぶしいほどの金色に光りかがやいていたのである。そして、さわりたくなるような、やわらかそうな金色のかみのはりついたひたいの下から、これはまた、すばらしく青い目がのぞいていたのである。

北村先生は、みんなのぶえんりよな目つきをやめさせようと、大声で彼を紹介した。「おなじく、きょうから、このクラスのお友だちになる太田デンベエくんです。」

みんなはとたんに、のどちんこがひっくりかえるほどの大きな口をあけてわらいだした。もし、これが「ヘンリー・トマス」とか「ジョージ・ミッチェル」とかいいう名まえだったら、だれもわらいだしはしなかったろう。ふつう、金色のかみで青い目は、北ヨーロッパ系といわれている。

さしずめ、彼は外国映画の主人公で、コペンハーゲンのうら町でネコとひなたぼっこをしているとか、ニューヨークの街角で新聞を売っているとかいいたほうが、はるかににつ

かわしい。

にもかかわらず、こともあろうに太田デンベエとは、おそろしく古風な名まえである。

とても宇宙船の飛ぶ二十世紀の日本人の名まえとは思えない。

みんなは口ぐちに「デンベエ」「デンベエ」とくりかえしながら、いつおわるかもしれないきおいで、げらげらとわらいつづけた。と、その青い目のデンベエが教壇の上から、とつぜん、大声でどなったのである。

「なんだってんだよう。とうちゃんにつけた名まえにもんくがあるかってんだ！」

みんなはさすがにぎょっとした。これだって、そうだ。デンベエがすばらしくなめらかな英語で、

「ハロウ・エブリボディ・アイム・グラッド・トゥ・スイー・ユウ（こんにちは、みなさん、どうぞよろしく）。」

とかなんとかいうんではないかと思つてたところ、いきなり、すこしばかり柄のわるいベランメエ調でがなりたてたからだ。

すると、そのそばに立っていた背のひくい、まっくろけな中年の女が、これまた、

「デン！ デンてば、かあちゃんいったらう。おぎょうぎよくしなきゃ、うちへかえって、

ひどいよ！」

と、小さなからだににawahぬ大声おおこえでどなったのである。青い目のデンベエはちろりと小さな舌したをだした。みんなはまた、いっせいにわらいだした。けれども、もうデンベエはおこらなかつた。こんどの笑いわらは、みんながデンベエを仲間ななかまとしてみとめた笑いであることが、デンベエにもわかつたからだ。

休み時間になると、みんなはなんとなく転校生てんこうせいのそばへ、ものめずらしそうによつていくものだ。まして、このクラスには、七人の転校生てんこうせいがあつたのだ。それなのにみんなは、自分の机じぶん つくえのところからうごかずに、じっと青い目のデンベエを見ていた。それは、デンベエひとりひとりが転校生てんこうせいのようだつた。

みんなは、できることなら、いまずぐとびだしていつて、デンベエにことばをかけたかつた。けれども、ぐあいのわるいことに、あのまっくらな小さな母親ははおやが、教室きょうしつのすみにじつと立つたまま、みんなをねめまわしていた。その顔は、

「うちの子に、へんなことをいつたりしたら、ただじゃおかないよ。」

と、いつているみたいだつた。けれども、ぐあいのわるいのは、みんなばかりじゃなかつた。デンベエは教室きょうしつのすみの母親ははおやのところへいつて、しきりに、なにやら小声ここえでいつてい

る。母親^{はおや}はうなずきはするものの、ときどき首^{くび}を小さくいそがしくふる。

ちよつと見たところ、アメリカの少年に、メイド（お手つだいさん）のおばさんがつかえて
いるといったかつこうだった。なんにも知らない人が見たら、このおばさんは英語^{えいご}がわか
るのかなあと、びっくりするかもしれない。

そのうちに、デンベエが大声^{おおこえ}でわめきだした。みんなはかたずをのんで、目をまんまる
にして、そのようすを見ていた。

「なあ、かあちゃん。もういいってばよ。おれ、ぐあいわるくて、しゃあねえよ。」

「なにいつてんだい。かあちゃんがいないと、おまえ、なにをしでかすか、わかったもん
じゃないんだから。いいかい、なんでもはじめがかんじんだよ。はじめのうちぐらいぎょ
うぎよくしておくもんだよ。」

「だから、わかったっていつてんじゃねえか。しつこいなあ。」

「デン！ 親^{おや}にむかって、なんて口きくんだよ。ばちがあたって口がひんねじれるよ。」

みんなはくすくすわらいだした。どう考えても、このちんちくりんのおばさんから、金^{きん}
色^{いろ}のかみと青い目をした子どもが生まれたとは思えないのだ。

みんなはそのことをきいてみたくて、うずうずしていた。

——早くあのおばさんかえらないかなあ。——

みんな、そう思っていた。もしかすると、この青い目のデンベエの父は、アメリカ人がイギリス人かフランス人かイタリア人か……。

つぎの時間の最中に、デンベエの母親は先生になんども頭をさげてかえっていった。みんなはほかの転校生のことなどそっちのけで、いや、ほかの転校生もいっしょに、デンベエのところへおしかけた。デンベエはにこにこわらいながら、みんなを見まわした。

「おい、おめえら、ききてえことがあるんだろ、なんでもきけよ。」

さあ、おゆるしが出た。とたんに、質問がデンベエにおそいかかった。

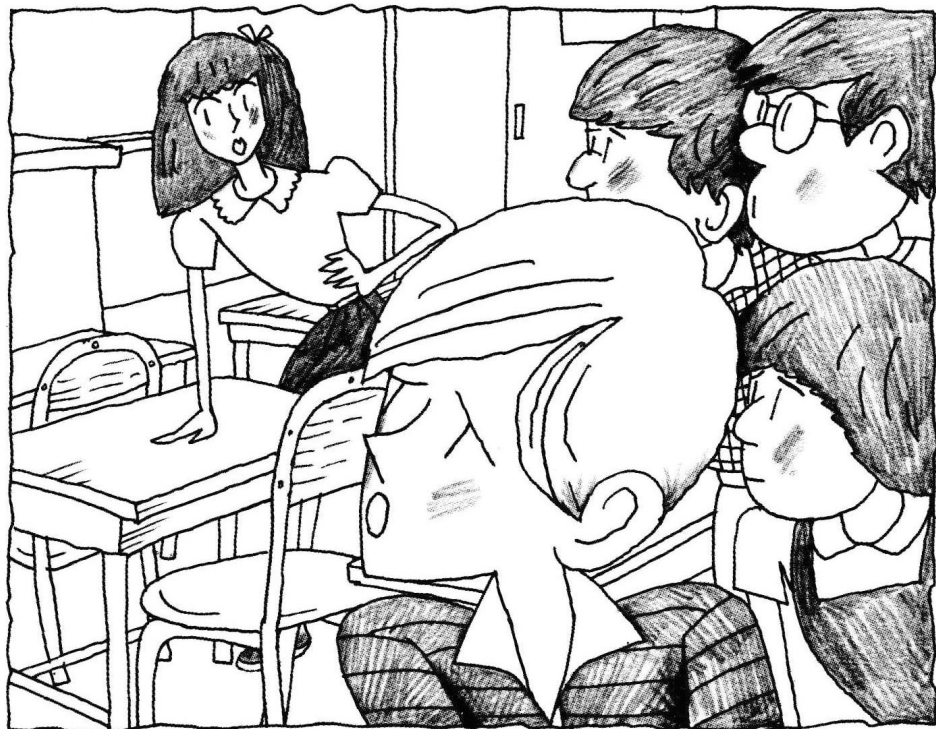
「ちよ、ちよっと待てよ。おらあ聖徳太子じゃねえよ。いっぺんにいろんなことをきかれたって、わかりやしねえ。ひとりずつやってくんねえ。」

「おい、おまえ、何人だ？」

「日本人さ。」

「どうして、日本人なんだよ。」

「きまってるじゃねえか、日本語をしゃべって、日本語で考えて、日本のおまんま食って、日本人のとうちゃんとかあちゃんがいるんだもんな。」



「ふうーん。で、とうちゃんは？」

「とうちゃんか。とうちゃんはデエ
クだ。」

「デエク？　なんだ、デエクって。」

「なんだおめえ、デエクを知らねえ
のか。カネや、ショッピキや、トン
カチで、うちをおったてるお職よ。」

「オシヨク？　あの新聞しんぶんなんか出
てる？」

「バカヤロウ！　職人しよくにんのことを、お
職人しよくにんさんというんだ。それがちぢ
まって、お職しよくじゃねえか。」

みんなは青い目のデンベエにまわ
したてられて、ぽかーんとしてし
まった。すると川田かわだマキ子が、そば

から、きんきら声で注意した。

「あの、デンベエくん。あんた日本人なら日本人らしく、正しい日本語をつかうべきよ。」すると、デンベエの鼻のあたりがふくらんだ。これはデンベエがおこった証拠だ。

「なにいつてんだい。そんなおめえ、氣どったことばをつかってたひにや、かあちゃんなんか、おれにおまんま食わせてくんねえや。」

「おまんま？ ごはんで、いいなさいよ。」

「バカヤロウ！ ヒネタクワンにみそ汁ぶっかけてかつこむのは、おまんまじゃねえか。」

ごはんでいうのはな、まっ白い米で、おひたしに、タマゴに、のりとか、ちゃんとおかずがそろってるのをいうんだぞ。」

みんなは、ふうーんとうなっていました。いわれてみると、なんとなくそんな氣がしてくるからふしぎだ。と、こんどは、このクラスでいちばんの氣どりやの佐山アキオがまえに出てきた。

アキオは、毎週、英語をならいに、となりの駅の外国人のところへかよっている。アキオの父は外国の会社につとめているので、アキオが大きくなったら、アメリカのハイ・スクール（高等学校）へ入れようと思っていた。そのアキオがデンベエのまえに立った。